



TITLE:

言語行動の初期形成過程(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

村田, 孝次

CITATION:

村田, 孝次. 言語行動の初期形成過程. 京都大学, 1968, 文学博士

ISSUE DATE:

1968-09-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212937>

RIGHT:

【 3 】

氏 名	村 田 孝 次 むら た こう じ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 31 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	言語行動の初期形成過程

論文調査委員 (主 査)
教 授 園 原 太 郎 教 授 泉 井 久 之 助 教 授 池 田 義 祐

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、言語機能の初期形成期として発達の重要な意義をもつと考えられる1歳期における非言語的発声から言語的発声への過渡的様相を、主として伝達ないし行動機能の面について解明することを目的とした幾つかの研究でなりたっている。本論文における分析の中心資料は、一定の条件の下に週1回1年に亘って追跡的に録音収録した5児の談話記録約8000標本であり、これを補って約100名の1歳児についての横断的資料及び母親からの回答が用いられる。

論文の構成は大別して4部よりなり、第1部では語の獲得過程について、使用語彙の消長及びその行動機能についての分析、要求語ならびに指示語の初期発達、及び初期の語機能の発達についての追跡的事例的分析が行なわれている。1歳期全体を通じて語彙の増加は著しいが、その間、語の形式と機能とが不安定で語の喪失と獲得および語の意味ないし使用法の変化が頻繁に起る事実を示し、しかもこの間に幼児語独特の汎用の縮小化と成人語化が着実に進行する過程を審らかにしている。著者はこの発達過程の中に、自発的自己訂正を重要な機制として捉えている。

第2部は本論文における最も特異の研究とみられる語の連鎖および文の獲得過程についての分析である。語連鎖を1語談話から統語的文への発達の過程としてとりあげ、その発達の様相、構造、表示内容について詳細な計量ならびに分析を加えている。種々の示標を用いて、連鎖が統語的規則に従った構造はもたぬが単なる語の無秩序な並置でなく、ある種の構造を含むこと、そしてそれが最も原初的な構文的伝達様式であり、そこに新しい表示および伝達が展開されることを明らかにする。従来日本語児では助詞の使用が比較的小さいとされていたが、著者はこれに対し助詞の使用が早く現われ且連鎖における重要な原初的統語的機能をもつものとする。日本語独自の自立話と助詞による連鎖が叙述ならびに陳述の基礎構造をなすことを種々の角度より示し、その発達の構造の詳細な分析によって、1歳後半において語の形式と機能とが急速に変化することを述べる。

第3部では初期談話に対する場面の効果についての若干の観察と分析が行なわれ、自発的談話数、有意

味な談話数などが、何れも場面及び発達時期と有意な関係をもつことを示す。

第4部は談話における育児者の要因がとりあげられ、育児者の機能および母親の役割について実証的資料により、育児者の談話が1歳児の談話発達にとって有利な相関性・指導性をもつことが考察されている。

参考論文は以上の知見を緯とし、これに諸家の学説・知見を経として、個体発生における言語行動成立について、発達—学習論的な体系的論述を試みたものである。代表機能・象徴機能が言語行動成立に必要な要件であるが、それが体系的言語の中に機能して始めて言語機能となることを論じる。

論文審査の結果の要旨

乳幼児期の言語習得過程についての心理学的研究は既に夥しい数が推積されているけれども、言語機能成立の根幹に立入る解明は至難の問題として殆どなされていない。著者が初期言語を談話行動としての機能において促え、これを詳密なる縦断的資料に基いて発達—学習論的観点よりその機能的分析に力めたことは、この問題に新らたに一步を進めたものとして、その功績は高く評さるべきである。

殊に1語談話から統語的構造への発達の位相として語連鎖型式の談話に着目し、これに詳細な分析を加え、日本語独自の助詞の使用を中心とする文構成の原初的な構造を指摘したことは、本邦における心理学的研究としては著者を以て嚆矢とするといひ得る。本論文が1歳期のみを取扱っている点に言語発達全体から見れば狭きに過ぎるとの評もあろうが、言語行動の初期形成期としての重要性を特に機能面に於いて明確にしたことは、極めて重要な寄与であるといわなければならない。

もとより本論文は言語発達の全貌について論をつくしたものでもなく、又初期形成期の問題に限っても比較言語心理学的問題や象徴機能との関係に関する思考心理学的問題との関連に於いて幾多の重要な問題が残されている。又著者が中心的資料とした縦断的録音標本も今の所僅か5児についての資料であって必らずしも分析に十分な量であるとはいえない。しかし本論文において著者が周到な分析的手法によって幾多の重要な新知見をもたらし、言語行動の初期形成期についての新しい機能的分析の展望を拓いたことは、参考論文に示された該博なる体系化の試みと相俟って、言語発達の解明に勝れて重要な寄与をなしたものと認められる。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。